県内出土の木製塔婆

斎木　勝

中世における供養の痕跡を示す木製塔婆が，佐原市大崎の大崎城跡[1]，大栄町吉岡の大慈恩寺遺跡[2]より出土しているので本誌上で紹介したい。

1．塔婆概要

1，2は大崎城跡出土の塔婆である。

1は二分割しているが長さは概略160cm，太さ3.5cmで桜材を用いている。本体はほぼ真っ直ぐで上端はV字形に枝分かれし，先端は刃物で切り落とした跡を確認する。

正面のみ削られ，そこには上より「□」「□」「ꡁ」「毎自作是念以何令衆生得入無上堂即成就佛身[3]」「右意者□為［　］信［　］／乃至法界平等利益　永禄四年［　］三日」／敬白」と墨書が確認される。上から五輪塔発心門，光明真言，法華教如来寿量品，以下，三行にわたって回向文と続く。主文はこの法華教如来寿量品の偈頌にあり，この偈頌は「破地獄偈」である。従って，報告書では上端の墨書を「日」，「月」「ꡁ」と判読しているが，梵字の六地蔵の「ꡁ」黒衣地蔵（地獄道）を分割して記入したとも理解される。墨書では「道」を「堂」，「速」を「即」としている。

2は，断片で長さ47cm，太さ3.5cmで，正面のみ削られているが，墨書等は認められない。

3は大慈恩寺遺跡から出土した塔婆である。長さは約148cm，太さ4cmで杉材であり，頭部は周辺より削り込み尖らせる。また，上部2ヶ所に削りを入れ，段状を示している。正面のみ削られ，その面に金剛界五仏の「ꡁꡁꡁꡁꡁ」以下「ꡁꡁꡁꡁꡁꡁꡁꡁꡁꡁꡁ」を墨書している。

これらの塔婆に共通しているのは，自然木を利用し，その樹皮を残し，正面を削ってそこに主尊を墨書書きしていること，また，1と3は上部に2ヶ所の刻みを施していることである。

2．塔婆資料

近年，発掘調査で低湿地の遺跡も数多く調査されたことにより，全国的に中世の木製塔婆が約40遺跡で出土している。その多くは長さ10～50cmで幅は1～5cmの笹塔婆や，長さが50cm，幅が5cmを超える板塔婆の出土が多い[4]。

前述した塔婆と同様の形態を持つ資料が広島県の草戸千軒町遺跡から出土しているので[5]参考として図示した。

4は上部と下部が分かれているが，同一個体と考えられ，下部は地中に刺した状態で確認されたものである。幅は6.6cm～7.5cmで正面のみ削り，いくつかの文字が読めるが，下部の「敬白」のみ判読できる。

5は現高128.4cm，幅5.2cm，厚さ3.5cmで上部が尖らせている。正面は削られ，上部に「ꡁꡁꡁꡁꡁ」の墨書を認める。

出土状況は，遺構に伴って杭状に4本が並んで，立っていたことは造立形態として注目される。

3．梢付塔婆

大崎城跡出土の「永禄四年」銘の塔婆は，頭部の状況をみると，大慈恩寺遺跡出土塔婆の頭部が宝珠のように尖らせていたり，草戸千軒町遺跡の塔婆も尖らせていることに比べ明らかに異なる。頭部に枝分かれの部分を残していることは，現代の供養塔婆の一形態である梢付塔婆に近いのではないだろうか。

梢付塔婆とは，「木」偏に「肖」の旁で表記することから木の先端の細い「こずえ」から枝葉を付けた塔婆を示すものである[6]。現在の造立例を参考にしながら梢付塔婆を考えてみたい。

写真で示したのは佐倉市馬渡の墓地内の梢付塔婆であり，数カ所確認される。一様に石塔の背面の塔婆受に他の年忌の板塔婆とともに差し込んであり，直接地面に差しての造立はなかった。杉材を用い，高さは約250cm，下部で径4cmの若木であり，先端は尖っている。両面を削り，正面には「ꡁꡁꡁꡁꡁ」の五輪塔発心門

1・2（大崎城跡出土），3（大慈恩寺遺跡出土），4・5（草戸千軒町遺跡出土）

を記す。その下に頭字「これ」を示す字として「茲」で始まり，頭句「○○者」が続き「戒名」が入り，「三十三回忌」と年忌を記している。裏面は金剛界大日を示すバンを縦長に表記した梵字の下,「南無遍照金剛乃至法界平等利益　○年○月○日」と建立日を記し，「施主○○合掌」と記入する。

県内では，このような塔婆は柏市内[7]から報告されている。最近の調査によると杉の生木で作った塔婆は，ほぼ全県的な造立であったとされている[8]。利根川下流域の香取地区では著者の踏査が深く及んでいないためか確認されない。

印旛郡栄町等の例では，塔婆が樹木とした繁茂することは縁起がいいとするところから，実際に植木を用いて梢付塔婆とすることがあるという[9]。また，地面に差した梢付塔婆に樹勢がつき樹根が伸びて生木となると吉兆とされ，それで杖を作り長寿を祈ったという地域もある。

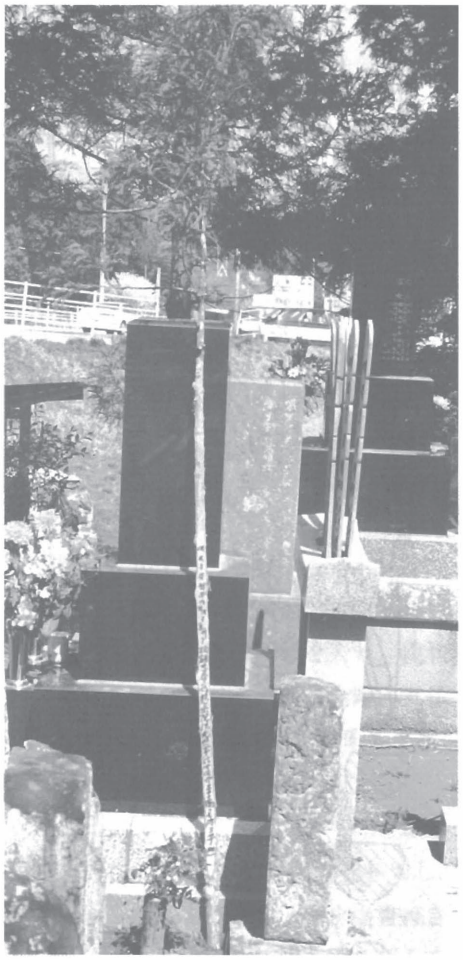
日本の祖霊信仰では，一般的に三十三回忌や五十回忌を弔い上げとして死者が祖先の仲間として迎えられることから最終年忌ということにしている。梢付塔婆は死者の魂が祖霊となるときの依代とも言われている[10]。

現在，真言宗では，漆の木を逆さにして塔婆として，その表面を削り，開眼作法を行った上，降三世印明を結誦して墓地に立てる。曹洞宗では，杉の幼木を用い，梢を残して両面を削り塔婆としている[11]。

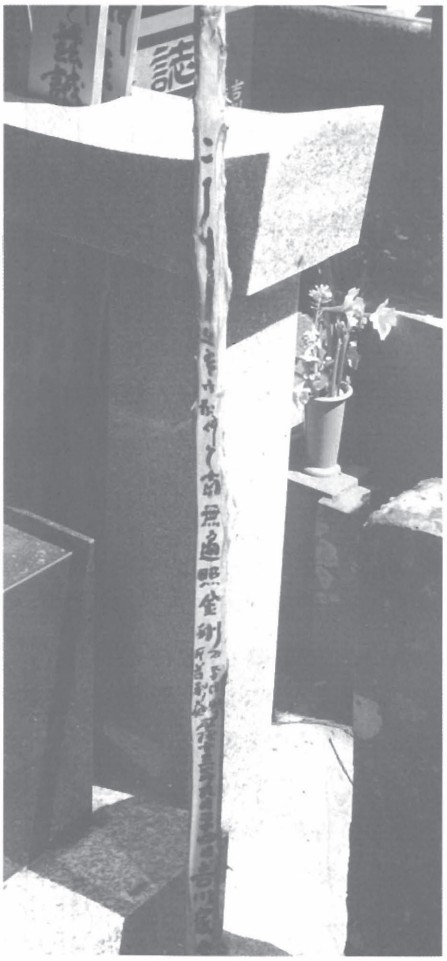
これは生きた樹木を用いることによる死者の供養と祖霊祭祀の標識とした伝統という指摘もなされている。地域によっては杉を用いるところから杉塔婆と言われたり，葉付塔婆とも言ったりする。全国的には杉の葉を付けた塔婆を立てるのが一般的で，近畿地方や北陸地方でも散見される。また，椎の木を用いる所も九州や一部の近畿や中部地方などで見られる。

4．終わりに

大崎城跡より出土した塔婆は，その出土状況では居



佐倉市馬渡墓地の梢付塔婆



部分

住域から濠へ投げ込まれた，あるいは流れ落ちたような状況であったと報告されている[12]。草戸千軒町遺跡では，塔婆類を出土した遺構は特定の区域に集中しており，日常的な居住地区から離れた場所が主流であったとされている[13]。一度供養が終わると塔婆類は整理され，水に流し，または火に浄める方法が行われたことから，供養が終わったことにより，この塔婆は地面より抜かれて濠に流された可能性が高い。

ここ香取の大崎の地に今から441年前の永禄四年（1561）に年忌を迎えて供養された人物がいたこと，しかも，一般的に自然木を用いた塔婆は杉等の常緑樹を用材としているが，当遺跡の場合は桜材を用いていることは注目される。また，当時の時間経過がどのような感覚で認識されていたかは不明であるが，三十三回忌とすれば故人を偲んで塔婆を立てて供養するというような，仏教を受容した人々がいたことは間違いないことである。

今回の報告に際し，資料の実見の機会を与えてくれた，財団法人香取郡市文化財センター，鬼澤昭夫・黒澤哲郎両氏には大変お世話になった。また，県内の塔婆造立の状況等，広い民俗調査での大変高い識見の中でご教示賜った小林稔氏にお礼申し上げたい。

なお，大崎城跡出土の「永禄四年」銘の塔婆は，今年度の浦安市郷土博物館を初めとして県立・市立博物館を巡回する『出土遺物巡回展「房総発掘ものがたり」』で展示される予定である。

註

1）鬼澤昭夫『大崎城跡』（財）香取郡市文化財センター　2001

2）黒沢哲郎『大慈恩寺遺跡』（財）香取郡市文化財センター　1993

3）　毎自作是念（常に自らこの念をなす）
　　以何令衆生（何をもってか衆生をして）
　　得入無上道（無上道に入り）
　　速成就仏身（速やかに仏身を成就することを得しめん）
　望月友善・坂田二美夫編「偈頌（其の二）川勝政太郎先生講義」歴史考古学第6号　1981より

4）西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」網干善教先生古稀記念考古学論集　2001

5）広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ―南部地域南半部の調査―』　1995

6）新谷尚紀『死・墓・霊の信仰民俗史』歴博ブックレット⑧　1998

7）柏市教育委員会『柏の民俗考察編』1991

8）小川直之「最終年忌」『千葉県の歴史別編民俗1（総論）』　1999

9）小林稔氏のご教示による

10）伊藤唯真「卒塔婆」『日本民俗大事典』1999

11）藤井正雄『仏教行事儀礼書式大事典』1983

12）註1）に同じ

13）註5）に同じ